＜論　文＞

適応指導教室とはいかなる空間か
—＜卒業生＞の語りを中心に

樋　口　くみ子

要旨

「教育機会確保法」の成立にともない、不登校の子どもの受け皿として、適応指導教室の整備が急速に進められている。しかしながら、実際に適応指導教室を利用した子どもたちの視点に立った場合、その支援にどのような機能があったのかは明らかになっていない。そこで本稿では適応指導教室の機能について示唆を得るため、適応指導教室の＜卒業生＞に聞き取り調査を行った。

考察の結果、第一に学習経験の提供による階層格差の補填、第二に不登校行為に対して生じる社会的抑圧からの解放、第三に同じ不登校経験をもつ友人との自助グループ的なケア・問題解決という機能が示唆された。第一の機能は子どもの７人に１人が貧困状態にある今日の日本社会の現状において、経済資本・文化資本に乏しい家庭の子どもたちにとっては重要となりうる。第二と第三の機能については、他の適応指導教室実践と比較するかたちで、その機能の範囲を検証していく必要がある。この課題はとりわけ適応指導教室の整備が進む現在において重要な課題の一つだといえる。

キーワード

不登校、オルタナティヴ・スクール、教育支援センター（適応指導教室）、居場所空間、子どもの貧困

1．はじめに

2016年12月の「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」（以下、「教育機会確保法」と表記）成立にともない、不登校の子どものための学外施設が大きく変容しようとしている。なかでも現在、急速に整備が進められているのが、地方自治体や教育委員会が設置する「教育支援センター（適応指導教室）」（以下、適応指導教室と表記）である。学外施設のうちフリースクールは都市部に集中して利用料の負担もあるのに対して、適応指導教室は小規模な自治体にも広がって利用料が無料であり、地方に暮らすまたは経済的困難を抱えた不登校の子どもの実質的な受け皿となってきた。そして、教育機会確保法のもとで「無償

の学習機会」の確保が強調され、まずは全ての自治体に１つ以上の教室を確保すべく、設置促進が図られている（樋口 2016）。

これまで適応指導教室に関する研究では、「学校復帰」「心の居場所」「心の居場所から学校復帰」「心の居場所から進学就職」という類型ごとに異なる支援が構築されていることや、教室の支援を構築する上で指導員の専門性の発揮が制度化の度合いに左右されること、制度化のあり方により実施可能／困難な支援があること、などが明らかにされてきた（樋口 2018）。適応指導教室はしばしば、文部科学省のかつての定義[1]になぞらえて、学校復帰を至上目的とする支援を行う施設だと誤解されることがあるが、実践の場においては学校復帰に留まらない機能を担っている。だが、実際に適応指導教室を利用した子どもたちの視点に立った場合、その支援にどのような機能があったのかは明らかになっていない。

このような適応指導教室の機能に関する研究の不在は、フリースクール研究と対照的である。フリースクールの機能については、外部から子どもたちを隔離するかたちで、不登校を肯定的にとらえることができること、などが指摘されてきた（朝倉 1995）。他方で、そうした不登校の肯定的な物語の効果がいつまでも有効ではないことも、フリースクール卒業生を対象とした調査から明らかになっている。具体的には、高学歴の不登校経験者ほど、不登校経験を否定的にとらえがちである（貴戸 2004）。

これに対して、適応指導教室の利用者や＜卒業生＞の声にもとづく研究や記録は、管見の限り見当たらない。例外的に、フリースクール出身の不登校経験者のなかから、ごく短い間だけ適応指導教室を利用したが合わなかった、あの施設はダメだといった声が出される程度である。しかし、こうした一部の経験者の声だけを拾い上げることは、適応指導教室の姿を見誤る可能性がある。文部科学省の統計を見る限り、適応指導教室利用者は例年、不登校経験者の一割以上を占める[2]。また適応指導教室の量的

1　旧文部省は適応指導教室事業を開始した当初より、「学校復帰を支援」する施設として適応指導教室を位置づけてきた。それは施設総称が「教育支援センター」に変更となった後にもみられ、例えば「不登校への対応の在り方について（通知）」（平成15年５月16日付け15文科初第255号）の中の「教育支援センター（適応指導教室）整備指針（試案）６．指導体制等」にもみられる。

2　例えば文部科学省の「平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に対する調査結果」によると、当該年度の不登校児童生徒数は計164,528人で、このうち学校外

調査からは、利用者の多くが中学３年からの利用であり、卒業まで利用する子どもが多いことも示されている（樋口 2013）。つまり、制度上は、原籍校に籍を置きながら「通室」する教室という位置づけであるにもかかわらず、実質的には学校に戻ることなく高校などに進学していく――いわば教室を＜卒業＞[3]するかたちで適応指導教室を利用する子どもたちが多いという現状がある。こうした子どもたちにとって、適応指導教室がどのような機能を担っているかを明らかにすることは、適応指導教室の制度化が進む今日において必要な作業となるだろう。

そこで本稿では、適応指導教室の＜卒業生＞の声をもとに、適応指導教室の機能を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

2-1. 事例の選定

筆者は2012年３月、全国の適応指導教室に無作為抽出による質問紙調査を実施した（有効回収数255票、回収率38.6%）。さらに、この調査で協力を承諾してくれた134自治体から自治体の人口規模等を統制し、支援の四類型ごとに1自治体ずつ、計４自治体（Ａ～Ｄ市）を選定して、2013年９月～2014年２月に適応指導教室および関係機関への聞き取り調査を実施した。このうちＣ市の「けやき教室」（仮名、支援類型は「心の居場所から学校復帰」）では、2014年２月に、＜卒業生＞２名（男女１名ずつ）にも聞き取り調査を実施することができた。

本稿では分析にあたり、Ｃ市に関連する諸調査のうち、(1) けやき教室の＜卒業生＞である山崎遼君と佐藤美緒さん（いずれも仮名）への聞き取り調査を中心に用いる。２名とも2011年３月に同教室を＜卒業＞して３年が経過した、高校３年生である（調査時点）。これに加えて、＜卒業生＞が在籍していた当時の教室の支援に関する

の機関等での相談・指導等を受けた人数は実数で56,090人と、不登校児童生徒全体の34%が該当する。なかでも適応指導教室利用者は19,754人となっており、不登校児童生徒全体の12% を占める。

3　制度的にいえば、適応指導教室に通う子どもたちは原籍校を卒業するのであって、教室を卒業するわけではない。しかし、じっさいには原籍校に戻ることなく、高等学校などに進学していく生徒が多い。本稿ではこの点を鑑みて、これらの子どもたちを適応指導教室の＜卒業生＞と表記する。

情報として、(2) 指導員への聞き取り調査や、(3) C 市の自治体資料、(4) 適応指導教室質問紙調査の C 市回答データを補足的に用いる。また、一般的な適応指導教室への位置づけを図るうえで、筆者がこれまで実施してきた全国規模の適応指導教室データを活用する。

不登校経験者自身が語るという営みは、そもそもフリースクールなどの居場所空間で不登校経験を肯定的にとらえなおすという支援がなされ、結果として（一時的にでも）肯定感を持つことができたという前提により成り立っている。それは東京シューレなどの、民間施設利用者の声が収録された諸文献や諸活動、当事者学の研究からも十分に窺い知ることができる。

けやき教室では2010年４月から2013年半ばまで、不登校の子どもに肯定感を持たせるような実践という意味で、一部のフリースクールと類似した実践を行っていた。なかでもその実践が最も強化されていたのが、山崎君と佐藤さんの通室期間と重なる、2010年４月から2011年３月までの時期であった。つまりこの時期にけやき教室に通っていた通室生は、自らの不登校経験を語ることができる可能性が最も高いといえる。また、不登校支援施設の機能を判断するうえでは、ある程度の時間経過が必要であり、卒業後３年間のライフコースも含めて分析することができる。

ただし、＜卒業生＞２名の語りを、けやき教室全般、さらに適応指導教室全般の効果と一般化するには留保が必要である。適応指導教室研究によると、適応指導教室の実践は制度化の度合いと指導員の特質により変化しうる（樋口 2018）。制度化が確立している自治体では指導員の教室運営に対する自由采配は少なく、他方でそうでない自治体では指導員の教室運営に対する自由采配は大きい。けやき教室に関しては、従来制度化がほとんどなされておらず、指導員の裁量が大きい支援がなされてきた。そのため、2010年４月に着任した指導員の鈴木先生（仮名）のもとで、一時的にフリースクールと似た実践を行うことが可能となった。その後、同指導員の働きかけにより、カウンセラー配置など、C 市の教室の支援は、徐々に制度化の道をたどっている。

本稿ではこのような C 市の適応指導教室独自の特徴をふまえたうえで、他の適応指導教室にも共通しうる機能について示唆を得ることを目的とする。

2-2. 調査の概要

けやき教室の＜卒業生＞調査は、指導員を介して、2011年３月の＜卒業生＞のうち、2014年２月後半の訪問日程に合う対象者に依頼をしてもらうかたちをとった。同年の＜卒業生＞は全員が仲良く、LINE グループを通じて卒業後も連絡を取っているという。適応指導教室に顔を見せることもあるため、その機会に調査を依頼した。結果的に、2014年２月26日に教室に来てくれる＜卒業生＞が２名おり、同日にけやき教室の相談室にて、１対１の面接調査のかたちで実施することができた。

聞き取りにあたっては、当事者学の不登校研究の知見をふまえ（貴戸 2004）、調査者自身も異なる都道府県で異なる年代ではあるが中学２－３年時に１年半の不登校を経験していること、中学卒業までの９か月の間、適応指導教室に通った経験があることを伝えてある。ただし、貴戸の調査のように調査者自身も分析対象に含めるのではなく、「自身の経験は時代的にも古いものであるため、今日的な不登校経験の話を、対象者の二人から聞かせてもらう」という立場を取った。

質問項目は半構造化インタビューにより、「適応指導教室に通っていたときのこと」「適応指導教室を卒業した後のこと」「適応指導教室に通う前のこと」について、それぞれの状況を語ってもらった。質問項目の概要は表１の通りである。

表１．＜卒業生＞調査項目

①けやき教室に通っていたときのことについて

・けやき教室に通うことになったきっかけ／紹介されたきっかけや、通おうと思うにいたった理由（「無料だったから」など）／けやき教室にはどのように通っていたのか／送り迎えや、徒歩など／けやき教室ではどんな活動をしていたのか／日常的な活動や、時期ごとにやっていた活動など／活動の中に、普段だったら出来なかったこととかあったのか／先生や友達との関係について／どんな関係を築けていたのか／けやき教室に通うようになってから、親や学校、近所の人や親戚の人など、周りから受ける対応は変わったか／けやき教室に通う中で、この先の暮らし方について、いつごろからどのようなかたちのものを考えるようになったのか

②けやき教室を卒業した後のことについて

・その後の進路のおおまかな流れについて（例えば、遠くの宿舎制の学校に入ったなど）／その後3年間の日常的な生活について（例えば、部活に入っていた、土日にバイトをしていたなど）／高校に通うようになってから、親や学校、近所の人や親戚の人など、周りから受ける対応は変わったか／周囲の先生や友達との話のなかで気づいた、自分だけが知らなかったこと／（もしあれば）学校に行かなかったことが原因だと思われることで受けた、嫌な思いやもどかしさ／周囲の先生や友達との話の中で気づいた、自分は知ってて他人が知らなかったこと／（もしあれば）学校に行かなかったからこそ、知ることができたこと／今の友人や先生などに不登校のことやけやき教室のことを話したことはあるのか（もしあれば、その時の反応はどんな感じだったのか）／この先の暮らし方や将来像について、今どのようなものを考えているか／不登校であってよかったと思うこと、悪かったと思うこと／けやき教室に通ってよかったと思うこと、悪かったと思うこと

③けやき教室に通う前のことについて

・学校に行かなくなった時期と期間／学校に行かなくなる前に積んだ経験（例えばスイミングに通っていた、バイオリンを習っていた、博物館や美術館に通っていたなど）／ 学校に行かなかった頃の基礎的な周辺環境／家族構成（兄弟の有無など）や、日中の過ごし方（例えば「家にいた」、「よく週末に家族で外出していた」といった暮らし）や、外出先など／出かけたい先、やりたいことがあったのにできなかったこと／出かけられた先、やりたいことでできたこと／学校に行かなかった時期に親や学校、近所の人や親戚の人など、周りから受けた対応と、それに対して思ったこと／けやき教室に通う前に考えていた、この先の暮らし方について ／（もしあれば）けやき教室に通う前に感じていた不安や悩み

＜卒業生＞2名の聞き取り調査データの公表については、調査対象者本人および適応指導教室の双方から許可を得ている。

以下、3節では山崎遼君、4節では佐藤美緒さんの語りを描き、5節で2名の経験を分析していく。

3. 山崎遼君の経験

3-1. 適応指導教室に通うまでの生活

山崎君は自営業の父と専業主婦の母、4歳上の姉（私大生・遼君が不登校だった当時は高校生）と6歳上の兄（私大卒・遼君が不登校だった当時は大学生）との5人家族である。父親は自営業で人を雇っているが、繁忙期には母親も仕事を手伝うことがある。

遼君はそもそも「小学校もあんまり好きじゃなかった」が、卒業までは通い続けた。

しかし、「なんかもう学校自体を嫌いになって、なんて言うのかな、強制されるのが嫌なんで」、中学進学を機に１日目から不登校となり、そのまま中学３年の卒業時まで学校には通わなかった。

不登校になってからの日々は、自分の中で「なんか罪悪感」があるため平日の朝と昼は外出しづらく、昼夜逆転するかたちで、家で同じゲームをやって過ごしていた。山崎君が不登校をしていることについて、父親は別に何も言わなかった。母親は最初は言ってきたが、「絶対行かん、絶対行かん」と伝えると、何も言わなくなったものの、「ほんま学校行ってほしそうな感じの雰囲気を醸し出して」いた。兄と姉からはずっと「お前はよ学校いけや」と言われ続けた。ただし、親戚は特に何も言ってこなかったので、いとことは普通に遊んでいた。

不登校になってから最初は「全然、危機感なかった」。しかし、２年生を迎えるあたりから心境が変化してきた。「もうだんだん、ああ、やばいわ」「このままやったらもうニート生活や」「このままやったらほんま、仕事もないし」「もう、孤独死みたいな」と、焦り始めた。進路について相談する人は周囲にいなかった。

転機が訪れたのは中学２年の夏である。「さすがに、危機感を感じてきて。このままやったらちょっと（進路も）さすがにやばいな」と思っていた矢先に、親から軽い感じで「とりあえず、行ってみい」と、適応指導教室を紹介された。適応指導教室の情報を親がどこから得たのかは分からない。遼君自身は学校とは一切連絡を取っていなかったが、もしかすると学校からの情報提供によるものだったかもしれない。言われるがまま、適応指導教室に行ってみることにした。

3-2. 適応指導教室利用後の変化

「とりあえず」で通いはじめたはずの適応指導教室だったが、気づけば「皆勤ぐらいの勢い」で行くようになった。通い始めた頃は毎日教室のなかで「みんなで話して遊んでたりして」過ごしていた。３年になると指導員が鈴木先生に代わり、教室の活動内容も変わった。「朝一時間だけ勉強しよう」ということにはなったが、それでも残りの８割方は遊んで過ごした。朝の勉強が終われば、午後は近くの体育館にてみんなでバドミントンをしたり、山に登ったりしていた。放課後になると教室の友達と「とりあえずチャリでこいで、ひたすらなんか色々」遊びまくった。

適応指導教室に通うようになってから、自分の気持ちや周りの対応が変わった。その時の状況を思い出しながら、遼君は次のように語る。不登校になった当初は「罪悪感」で家の外に出られなかったのに、適応指導教室に通うようになってからは「もうほんま、ずっと出れましたね。もう家におらんと」「何やろう。けやき（教室）来たら、なんかもう、学校行ったような気持ちになるから、それからもう遊んでも大丈夫みたいな、罪悪感なかった」。遼君に対する家族の風当たりも変わった。適応指導教室に通う前は「家のなかがギスギスしたような」感じだったが、教室に通うようになってから母親は「ちょっと明るくなったというか、喜んで」る様子を見せるようになった。姉と兄も「はよ学校いけや」とは全然言わなくなった。

3-3. 進路選択から卒業まで

遼君が進路について考え始めるようになったのは、中学３年時、学校からの進路指導がきっかけである。学校は親経由で進学先を勧めてきたが、その内容に遼君は焦りを覚えた。「最初が、ほんま、定時制とか勧められて、このままやったらいかんかなと思って」、「高校がやっぱりなんか、あんまりよろしくない高校に（笑）、このままやったらあんまりなんか、不良学校みたいなところに行くようになるの嫌やった」。

そこで中３の夏休みに塾に通い始め、志望校を考えながら勉強し始めた。最終的には「公立（高校）をねらって、公立を二校受けた」が「内申がなかったんで」「二校とも落ちて、結局私立（高校）」になった。合格した私立高校の普通科は、遼君にとっては「すべりどめみたいな感じで」、「ほんま下の下」の高校であった。普通科に進学予定だったが、合格後に高校から手紙が来て、特進コースに進学するに至った。

3-4. 適応指導教室卒業後の生活

高校入学時に、クラスメイトに「僕、ほんま学校行っていなかった」と言った。適応指導教室に通っていたことも「知っている人は知って」いるし、適応指導教室がどのような場所かも「知っている人も知って」いる。だから、中学時代の「体育祭の話とか、卒業式の話とかされたら分かんない」が、「周りはもう話とか合わせてくれ」た。

高校進学後は毎日８限目まで授業があり、部活もアルバイトもせず、夏休みもなく「ひたすら勉強」の三年間だった。中学時代に不登校だった子がクラスにもう１人い

たが、「勉強ばっかり（の生活に）ついていけんくて」学校を去った。その後、不登校だった子がもう１人転学してきたが、「またその子も辞めて」、不登校経験者で高校３年生まで在籍できたのは遼君だけだった。中学時代に塾に通っていなかったら、自分も高校を卒業できたかというと「ちょっと、では無理」だったと思う。適応指導教室でも朝の学習時間があったが、それは「習慣的に（学習する姿勢が）ついたから」良かったとは思うが、自分に学力がついて高校生活を乗り切ることができたのは、塾のおかげだと思っている。

調査時点で遼君は、大学に合格し入学手続きも終えて、新学期までのしばしの「休憩」中であった。「今はほんま、楽しい」。大学に進学したら、今度は資格を取りたいと考えている。そして「お金の計算とか好きなんで」、大学卒業後は銀行員になりたいと考えている。

3-5. 自分にとっての不登校・適応指導教室経験

調査時点の遼君にとって、不登校になって良かったと思うことは「ないですね。あんまない」。むしろ悪かったと思うことの方が強く、あの頃は「ゲームばっかやっていたんで」、今から思うと「時間がもったいなかった」。当時は「面白かった、楽しかった」しそれでよいと思っていたが、今から振り返ると「代わりに、もうほんま普通に学校生活送って、ほんま普通に勉強して公立高校行けたらよかったかな」とつくづく思う。親に何か言われた訳ではないが公立高校に行ってあげたかった。「（兄姉）みんな私立（高校・大学）、私立（高校・大学）ときてね、また（自分も）私立（高校・大学）ときたらもう、家破綻するん違うか」と思っていた。

他方で、今から振り返って、適応指導教室に通って悪かったと思うことは「出てこない」。とりわけ当時出来た１歳年下の友達とは「気が合うし」「今でもまだ遊ぶし」、「友達できたんが良かった」。適応指導教室は終わるのが午後２時なので「友達と昼から遊べるという特権が良かった」。適応指導教室に通うようになってからは外にも「罪悪感」なく出られるようになったし、適応指導教室には「結構変わった人いっぱいおった」ので「それでなんか色々しゃべっとったら、なんか、多分、よう人間観察する」ことができた。それで、色んな人と「話していて、これ言うたら怒るやろうなとか」「空気はなんかよう分かるように」なり、高校での人間関係に役立った。

4. 佐藤美緒さんの経験

4-1. 適応指導教室に通うまでの生活

美緒さんは母の実家に身を寄せるかたちで、祖母・母・本人の３人で暮らしている。「結構家がごちゃごちゃ」しており、「ヤンチャ系」だった調理師の父は、美緒さんが小１の時に蒸発した。そのため母は叔父が家族経営をしている工場に勤めながら、一人娘の美緒さんを育ててきた。父は美緒さんが小４の頃に戻ってきたものの、「なんかそういうのでちょっと、いまだにちょっと一緒に住んでいなかったりっていうので」、現在は隣の市で一人暮らしをしているという。ただし、足の悪い母親が買い物に行く際に父親が送り迎えをしてくれるなど、しょっちゅう会う仲ではある。

父親の蒸発により美緒さんは「精神的にちょっと若干不安定に」なり、小５の終わりから小６の前半に不登校となる。小６の後半から卒業までは再び学校に行くようになったものの、中学校に入ると「一気に人数が増えて、またそれで『おおうっ』て（心が苦しく）なって、で、なじめなくて行かなくなって保健室登校」を始めた。しかし「保健室の中でまたもめて」しまい、学校に行かなくなった。

不登校になってからは、「昼とかに起きて、まあ、適当にご飯を食べ、で、まあ、テレビなり携帯なり、まあその、趣味のことをちょこちょこっとして」「基本的にずっと家にこもっていた」。「でも結構その辺はありがたいことに（家族の理解があって）色々させてもらって」、「ギターがやりたいっていってお年玉貯めて買って、で、まあ、家でずっと弾いて」いたりした。髪を染めてピアスも開けたが、外出することはほとんどなく、「引きこもっていたときに唯一出るときは（友達と）小学校に遊びに行くときだけだった」。

美緒さんが不登校理由を言わないので、母親は「すごくぴりぴり」しており、「なんであんたは行かへんの」「行けるやろう、行けるやろう」と言い続けた。他方で祖母は「のほほんとしている人なんで基本何も言わない」でいてくれた。父親も同じく学校に行けとは言わなかったが、「多分言えなかったんだと思う、引け目があって」。「ヤンチャ系」だったこともあって、父は「おまえが髪の毛染めようがピアスを開けようがおれはやってきたから文句は言わんし、おまえのやりたいことはやったらいいけど、おれたちは手出ししないと。自分でやったことは自分で片つけろよ」と、「全部自己責任」で「手放し教育というか。割とフリーダム」だった。隣近所に親戚が多く、20

人近くいるいとことも頻繁に交流しており、いとこのなかにも不登校の子がいたため、美緒さんが不登校であることは親戚には「あんまり気にされてはなかった」。

学校の対応は教員によって違った。中学校の担任は基本的に3年間「腫れ物に触る」かたちで「だ、大丈夫？行ける？」みたいな感じの対応で接してきた。おそらく自分が「校則違反を繰り返すような人」だったので「ちょっと若干腫れ物に触る感は、増えていたんだと思う」。ただし、いとこたちも通い、小さな中学であったため、1年から3年までの学年主任には「おまえ誰々のいとこやろう」「英語得意らしいやんけ」と情報が筒抜けで「結構まあ何やかんや仲良く」していた。

その頃の美緒さんの心境としては、「ほんまに死にたいとは思ったこと」もあったが、むしろ「不安とかっていうより、いら立ちとかが多かった」。父親に対して「あんだけ放っておいて、よくのこのこ帰ってこれたな」と思った。母親に対しても、蒸発した父親を捜しに出かける間一人にさせられて「なんでこんな放っておかれてんのやろう」、「あ、絶対要らん子なんや」と思った。一人暮らしがしたくて仕方なかった。「もう、適当にバイトとかしてお金ためてもう1人で住む、っていうのをずっと考えて」いた。「親の顔を見るのが嫌」でたまらなかった。

そんな美緒さんに転機が訪れたのは中2の夏である。保健室登校ができなくなった後に、保健室の先生から適応指導教室を紹介された。当時、ちょうど芸能系の養成所に通い出して少しずつでも「人に慣れないと仕事にもならない」のではないかという気持ちや、自分自身「変わらなあかん」という思いがあった。そんななか、親から「少人数やから行けるやろう」という「強い勧め」や、友達がすでに通っていたということもあり、適応指導教室に行ってみることにした。

4-2.　適応指導教室利用後の変化

適応指導教室に通い始めた2年生の頃は「普通にけやき教室に来て勉強してお弁当食べて」、教室に置いてあるエレキギターやピアノ、キーボードで「ちょっと遊んだり」、パソコンで「ちょこちょこっと」遊んで過ごしていた。3年生になると、先生が代わり、鈴木先生と20代前半の荒川先生（仮名）が来てからは、教室の活動や過ごし方が変わった。体育の一環として、荒川先生が「サンドバックみたいなん持ってきはって」総合体育館で「（空手の）けりの練習とか」をするなど、教室の外に出て、こ

れまでやったことのない活動をすることが増えた。荒川先生も親しみやすいし、通室生も増えて友達が一番多かったというのもあり、「多分なんか３年のときが一番楽しんで」行けた。

適応指導教室に通うようになってから、周りの対応が部分的に変わり、自分も変化したと思う。最初は「ちょっとなじみにくかったり」して適応指導教室にあまり通えていなかったが、少しずつ慣れるようになってきた。すると、母親から「けやき教室だけじゃなくて学校に行け」と言われるようになった。「今、慣れてるからこれでいいやん」と言い返すと「おまえ、これで納得してくれたら困るねん」と言われ「ちょっともめ」るようになった。しかし、中学３年生になって適応指導教室に通う日数が増えるようになってからは「なんで行かへんの」とはあまり言われなくなり、その点では対応が「かなり変わった」。ただし、相変わらず生活習慣についてはよく小言を言われた。中学校の学年主任は「（もともと）気にかけてくださったりとかはしていた」ので「そこまで対応、変わってはない」が、適応指導教室に通うようになり自分も「結構明るくっていうかね、変わった」。

4-3. 進路選択から卒業まで

美緒さんは中学卒業後、美容系の専門学校に進むつもりでいたため、「結構ぎりぎりまで『高校には行かない』って言っていた」。しかし、「景気が下がってきたぐらいだったんで、高校卒業、最低でもしていないと就職が危うい」という話になり、中卒の父親からも「今もし辞めて別のところにってなったら、まあ難しい」と言われた。母親からも「もちろん、高校には当たり前のように、まあ、行ってはほしい」「できれば全日制に行ってほしい」と言われた。適応指導教室の先生たちにも、「高校は思い出作りとして行っておいたほうがいい、絶対楽しいから」と言われた。更にはよく話を聞いてくれていた一番年上のいとこからも「いや、俺も途中で（高校を）辞めてしまったけれども、行っていたときには楽しかったから、行っておけ」、「専門学校も高校卒業してからでも（行くので）遅くはないから」と言われた。こうして「みんなに押されるかたちで、結構本当にぎりぎり」の時期にあたる、中学３年の１月に高校の学校案内を取り寄せた。

取り寄せた学校案内のうち、通信制の単位制高校は「あ、ここやったら行けるん違

う？」と母親が言ってきた。見てみると、普通科ではないが制服がかわいらしく校舎がきれいで、不登校経験者へのサポートがあり、さらに系列校には専門学校が多くあり、高校卒業後の進路も見える形だった。見学に行ってみて「気に入って」、進学を決めた。もう一校、芸術系の高校との間で進路を迷ったものの、「中学校のときにそれこそ不登校だったもんで勉強がなかなか、できなかった」のと、芸術系の高校と芸能系の仕事場とが遠く離れており、両者を両立させるのは難しかったのであきらめた。

高校受験にあたっては適応指導教室の学習の時間が役に立った。「何やかんやぐうたらぐうたら言って文句言ってあんまり」勉強をしていなかったうえに、美緒さん自身が「追い込まれないとやらないタイプだったんで、テスト勉強だけここ（けやき教室）で先生にみっちり教えてもらっ」た。

4-4. 適応指導教室卒業後の生活

単位制高校進学後、１年生の頃は芸能系の「仕事ばっかり」していた。しかし２年生と３年生の前期には「ぐっと詰め込んで」単位を取った結果、３年の後半は１教科を受講するだけで卒業できるほどになった。

高校に進学してからはアルバイトもした。学校には、不登校だった子と、逆にものすごくやんちゃな子との、両極端な子がいた。「いろんな人種がいるんで」「新しい発見みたいな」感じで、「すっごいおとなしい子とものすっごいヤンキーの子が仲良くして」いたりする面白い学校だった。不登校経験者の「ケアじゃないですけど、そういうのを結構しっかりしてくれている」高校で、空き時間には「先生ちょっと」と言っては話を聞いてもらったりと、「３年間ずっとサポートしてくれる感じ」の学校だった。授業がなくても「先生と話すのが楽しくて」学校に行っていた。学校の学習内容も「そんなに難しくない」し、「教科書見ていたら全部解けるようなやつ」だったので、「普通の学校に比べたら全然」楽だった。人づき合いが苦手だったが、「（芸能活動）やっているの？」とか声をかけられる感じで、文化祭の実行委員を通して仲の良い子も増え、「気づいたら克服しているみたいな感じ」になった。

美緒さん自身の不登校経験と適応指導教室利用経験については、「結構いろんなとこで言って」きた。周囲に「適応指導教室っていうのがあって」と言うたびに「それは何？」というところからスタートしなければならなかったため、なかなか説明が難

しく、結局「フリースクールっていう説明の仕方しかできな」かった。美緒さんの話を聞いた周りの子たちは、「へー」「そんなんあるんや」「めっちゃ楽やん」と軽く聞き流す程度で、美緒さんの経験について「そこまでなんか、なんか差別的なというか、こう、軽蔑的な感じのことを言われたことはない」。

美緒さんの調査時点での進路として、高校を卒業したあと４月から美容系の専門学校に進学予定だ。「もともと細かいことがすごく好きで絵描くのとかも好きだった」のと、ネイルサロンは「例えばマンション１室借りて、で机とイスがあってその（専用）キットがあれば、それで営業ができる」というかたちで「意外と簡単に」起業できるため、進学を決めた。専門学校を卒業した後はネイリストやエステティシャンといった、美容系の仕事に就こうと考えている。

4-5. 自分にとっての不登校・適応指導教室経験

調査時点の美緒さんにとって、不登校で良かったと思うことが二つある。ひとつは芸能系の事務所に所属し仕事をしたおかげで「非日常じゃないですけど、新しい、何かそういう独特の勉強ができた」という点だ。これに加えて、もうひとつ、今でも仲良くしているけやき教室出身の友人達がいるのも「良かったな」と思う。

けやき教室は普通の学校より終わるのが早いので、放課後に「世間のこと」を学べた。子役での２年間と、中３以降の芸能界での生活は「すごく縦社会」で、挨拶や礼儀作法をしっかり学ぶことができた。他方で美緒さんが高校進学後に仲良くなった友達の会話は「全部、タメ口の子が多かったり」、「一般常識を知らない子がいっぱいいたり」、「世間話ができな」かったりして、逆に「この子たちはどうやって育ってきたんやろう」と驚いたほどだ。

不登校で悪かったと思う点は二つあるが、一番気になるのは「やっぱり勉強面」の遅れだ。「高校に入ってからものすごく後悔」した。「勉強しておけばよかったな」という思いは「いまだに」ある。そのため中学校の頃の教科書などは手元に残してあり、いまでも「たまにちょこちょこっと見るようにはして」いる。様々な教科のうち、とりわけ積み重ねの教科である数学は元々苦手であったが、不登校になってからはより苦手になってしまい、高校進学後にとても苦労した覚えがある。「結果的にあの、仕事はね、美容系に就くんで知識はあっていいんですけど、ねえ、もうちょっとなんか

まともなうちにまともに（勉強）しておけばよかった」と思う。

また、不登校生活を続けるなかで「やっぱり楽しめることがすごく少なかった」という点も後悔している。「学生生活、人よりやっぱり、半分ぐらい足りていないんで、このね、（高校を）卒業するシーズンになって、まあ高校が楽しいっていうのもあるんですけど、中学校をもうちょっと楽しんでいたら後悔せえへんかったかもなとは若干思ったり」する。

適応指導教室に通って悪かったと思うことはない。むしろ得られたものの方が大きい。それというのも、父親は帰ってくる時間がものすごく遅くて、「もともと（家族の生活）サイクルが全然合わない家だった」上に、「小学校入ってすぐに父親蒸発しちゃったんで、あんまりね、家族旅行の記憶がない」。そんななか、けやき教室の「社会見学というか遠足みたいな」活動を通して生まれて初めてテーマパークや水族館に行くことができたし、写真もいっぱい撮ることができた。加えて、先生方には「荒れている時期にいろいろ手助けしてもらって」ありがたかった。「鈴木先生なんかは本当によくけんかというか、ぶつかって、結構なこと言っていた」覚えがある。「もう放っておいて、ほんまに黙って、うるさい」とずっと言っていたが、手助けしてくれた。さらに、「人間関係的には通って良かった」と思う。けやき教室が「もともと不登校の子ばっかり集まっているから、同じような境遇同士なんですごく仲良くなるのが早かった」し、「その中でちょっとごちゃごちゃ」したりもしたが、「いまだに仲良かったり」する。高校進学後に適応指導教室以外から来た同級生に聞くと、「もう中学の子と連絡取っていない」「地元の子、誰一人分からへん」という子が多く、これ自体が貴重なことだと思っている。

5. 考察

5-1. けやき教室の機能

3節と4節では、けやき教室の＜卒業生＞である遼君と美緒さんの語りを見てきた。そこから浮かび上がる、当時のけやき教室の実践がもたらした機能として、以下の三点を挙げることができる。

第一に、学校は文化資本の豊かな家庭により有利に働くようになっていることは、教育社会学研究において広く知られている。しかし、不登校によって「学校に行かな

い」状態になると、子どもたちの学びは登校時以上に、家族の経済・文化・社会関係資本に左右されるようになる。こうした状況に対して、適応指導教室は学習や社会的経験を提供するという点で、階層格差の補填機能がある。美緒さんの語りの中に出てきた、適応指導教室に通うことで初めてテーマパークに出かけたという社会的経験や、受験時のテスト勉強を「みっちり」教えてもらえたという経験は、それを示す一例だといえる。他方で、塾に通う経済的余裕のあった遼君にとっては、学習は適応指導教室よりも塾の方が役に立ったととらえている。この点をふまえると、文化資本や経済資本に恵まれた家庭の不登校の子どもたちにとっては、適応指導教室の学習・社会的経験の補填機能はあまり必要のないものとしてみなされる可能性があることも示唆される。

第二に、不登校に対して生じる社会的抑圧からの解放、という機能がある。これは遼君と美緒さんがともに、適応指導教室に通い始めたことで家族との軋轢が緩和され、自らの精神状況も安定したと感じていたことからも窺える。

第三に、同じ不登校経験をもつ友人との、自助グループ的なケア・問題解決機能がある。遼君は学年が違っても卒業３年後も仲良くしている友達がおり、美緒さんも卒業後も友人とつながり続けている。こうした自助グループの効果は、単に心の支えという効果にとどまらない。遼君と美緒さんにとって適応指導教室での経験は、卒業後の人間関係を構築していくうえでのコミュニケーション能力の基礎にもなっており、彼らにとっての適応指導教室は居場所と居場所外部の接続に役立っているといえる。

5-2. 示唆される適応指導教室の諸機能

以上の点を踏まえて、けやき教室以外の適応指導教室にも通じる機能としては、どのような示唆が得られるだろうか。

第一に、学習経験の提供による階層格差の補填機能については、学習支援を行っている教室であればどこでも同様の機能があることが示唆される。なぜなら、適応指導教室はその利用が無償で、経済的に困難な家庭出身の不登校の子どもの実質的な受け皿となっているからである。

第二に、不登校行為に対して生じる社会的抑圧からの解放という機能については、その他の適応指導教室にも存在することが示唆される。なぜなら、けやき教室内部の

実践とは直接関係なく、けやき教室に通うこと自体が、遼君と美緒さんの母親やきょうだいにも影響を与えているからである。例えば遼さんの母親は「ちょっと明るく」なり、きょうだいも「はよ学校いけや」と言わなくなった。また、美緒さんの母親も、美緒さんが適応指導教室に毎日通うようになってからは登校刺激を行わなくなった。これは一教室の一時的な支援内容を超えて、適応指導教室に通うということ自体が、学校の代替機関に通っているという承認を周囲から得られやすいことを示唆している。

ただし、留意したいこととして、他の適応指導教室においては、実践内容によって、けやき教室ほどには社会的抑圧からの解放がなされない可能性がある。じっさい、鈴木先生が着任する前のけやき教室では、通室生たちは日々隠れるように過ごしており、教室側もできるだけ子どもたちと一般市民が会わないようにと強く配慮していた。同様の事例として、筆者が訪問した複数の適応指導教室において、適応指導教室内という狭い範囲のみが、子どもたちにとって解放の空間となっている事例が散見された。例としては、集合写真を撮るときに顔をそむけるなどして写らないように試みる子どもたちの存在や（訪問先のうち、3自治体3教室で観察）、卒業時に自分たちの文書記録を破り捨てて去った子どもたちの存在（訪問先のうち1自治体で確認）など、枚挙に暇がない。

鈴木先生の実践は、これらの事例とは対照的である。鈴木先生は「不登校を恥ずかしく思わないでおこうね」、「ここに来たら配慮はいらない」というメッセージを出していった。「もっと堂々と図書館も行こう」と、図書館や体育館など色々なところに連れて行った。体育館に行くと初めは「なんでこんな時間にこの子らがいるんだろう」という一般市民の目はあったが、子どもたちを連れて教室の外に行きつづけた。こうした経緯を経て、子どもたちは堂々と適応指導教室内外でふるまうようになったという[4]。しかし、鈴木先生も実践を続けていくなかで、揺れ戻しが起きている。実践の結果、不登校行為に罪悪感をあまり覚えない子どもたちが増加したことで、鈴木先生自身は「適応指導教室にいても、あんまり進歩してないよ」「けやき教室（にいるまま）でここを（卒業して）出たらだめだと。ここにいてたら、本当にもっと楽しい人生があるのに、それを体験、経験しないまま終わってしまうから、もっと本当に自

4　2014年1月9日、鈴木先生聞き取り。

分にあった友達も沢山いるよと、もっと（あなたの）こういうところが良いんだから、もっと違う所でそれを勉強しなさい」「それを勉強するには学校しかないでしょ」と指導を変化させるようになった[5]。つまり、樋口（2018）が指摘するように、適応指導教室は完全にオルタナティブな空間とはなりえず、解放空間の程度が広がろうとするたびに抑制の機能が働く可能性がある。

第三に、同じ不登校経験をもつ友人との自助グループ的なケア・問題解決機能は、子どもたちを複数名受け入れている教室であれば、どこでもその機能を担える可能性がある。ただし、その機能の効果がどの程度にわたって継続するかという点に関しては、留意が必要であろう。第二の機能をどこまでの範囲に拡げるかにより、その効果の持続期間も異なることが推察される。適応指導教室をいわば教室空間のみの「秘密」の居場所にするのか、それともけやき教室の一時的な実践に見られたように、市民にも広く承認してもらえるような教室を志向するか否かによって、子どもたちにとっても、教室での友達関係に関する受けとめ方は異なると考えられる。少なくとも、遼君と美緒さんに見られた卒業３年後まで続く人間関係は、適応指導教室を中学校に代替するような「フリースクール」的な学校とみなせたことにより成立している可能性が十分にある。

6. おわりに

本稿では、けやき教室の＜卒業生＞２名の語りを考察することで、適応指導教室の機能を考察してきた。その結果、第一に学習経験の提供による階層格差の補填機能、第二に不登校行為に対して生じる社会的抑圧からの解放機能、第三に同じ不登校経験をもつ友人との自助グループ的なケア・問題解決機能、が示唆された。

これらの機能のうち、第一の機能は経済資本・文化資本に恵まれた中流家庭の子どもたちにとっては必要ないとみなされる可能性もある。しかしながら、適応指導教室の利用が基本的に無償であること、子どもの７人に１人が貧困状態にある今日の日本社会の現状を考慮すると、経済資本・文化資本に乏しい家庭の子どもたちにとっては重要な機能となりうる。

5　2014年１月９日、鈴木先生聞き取り。

第二と第三の機能については、適応指導教室が実践の場において教育行政組織のなかでどのように位置づくのかという点とも関係している可能性があるため、他の適応指導教室実践と比較するかたちで、その機能の範囲を検証していく必要がある。これはとりわけ適応指導教室の整備が進む現在において重要な課題の一つだといえる。不登校の子どもたちが不登校のスティグマを付与されて肯定感を失うことがないよう、またそれと関連して社会的経験から遠ざけられないためにも、さらには子どもたちが適応指導教室という場を離れても支えあいながら人生を切り開いていくためにも、適応指導教室という施設が制度や実践の場において行政上どのような施設として位置づけられているのか、その分析が待たれているといえよう。

付記　本稿は、2013年度公益財団法人倶進会の一般助成に基づいた調査と、JSPS科研費 18K13100の助成による研究成果の一部である。

＜参考・引用文献＞

朝倉景樹『登校拒否のエスノグラフィー』（彩流社　1995）
樋口くみ子「教育支援センター（適応指導教室）の四類型」『独立行政法人国立青少年教育振興機構　青少年教育研究センター紀要』2号（2013）50-59頁
樋口くみ子「教育支援センター（適応指導教室）の『整備』政策をめぐる課題と展望」『＜教育と社会＞研究』26号（2016）23-34頁
樋口くみ子「教育支援センター（適応指導教室）」の支援の構築過程―四類型に着目して」『現代の社会病理』33号（2018）83-97頁
貴戸理恵『不登校は終わらない―「選択」の物語から＜当事者＞の語りへ』（新曜社　2004）
文部科学省「平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に対する調査結果」